

自害被成候て御座候。流石の御様子と皆々奉感候由に御座候。御痛敷儀に御座候。

一、本能寺合戦の實録

森蘭丸事、信長或時障子を明て來候間、たて、參候へと被申付候に、蘭丸參候て見候へばたて、有之所に、態と明候て又ひしとたて申候。扱罷歸候所に、信長態と試の爲に被申儀に候故、蘭丸に障子はあいて居候哉と尋被申候へば、蘭丸申候はたちて居申候由申候。信長唯今是にて聞候へば、ひしとたて申音いたし候事は如何と被申候。其時蘭丸申候は、たちて居申候得共、假初の儀ながら御大將様に、御明被成置候間、たて候へと被仰付事、諸人承居申候處に、たちて居申旨申上候ては、御疎末の様に罷成候ゆゑ、御言葉を反古に仕がたく候て、態と明候て又たて申候て、諸人に音を爲聞申候由申候。流石信長の氣に入候て、側近く被召仕候程の器量と存候。大將につかはれ申者は、意得あるべき儀と奉存候。蘭丸十四五歳の時の儀に候。

か様の儀をあしく心得候へば、阿諛便佞にして君の心の非をむかふるに罷成候。同行異情のたぐひ是にも限るま

じき事戒むべし。

其後本能寺にて明智日向守軍勢、本堂へどつとおし込候時、古堂の儀故ねだ落申由。其時分信長の鎗・長柄など數十本、本堂の天井に懸り居申候が、右の響にて悉落申候ゆゑ、それに先をふさげられ候て、大勢取のけなど仕候てゆとり有之に付、四方田何某と申者、脇の口より鎗提候ておし込候處、蘭丸左の手に刀をさげながら、白小袖に髪を修禪寺紙の平元結にて茶筌髪に結候てかけ出、何ものに候やとのしり候所を、右の四方田鎗にて突伏申候。蘭丸が跡より、信長白小袖ねまきのまゝにて、刀取て御出候て、何者に候やと被申候所、蘭丸惟任謀叛と見申候由申候へば、其儘奥へ御入被成候を、今一人の敵追懸候て、後を御見せ候事きたなく候由、言葉を懸候へば、信長見かへり被申にらみ被申候所、右の者矢を放候てすはだに射付申候。それに構不被申候て奥に入、自害と見え申候。其まゝ、火の手上り申候て致落着候。四方田何某、蘭丸が首取候て惟任に爲見候處、惟任目くらう成候てとくと見付不申、ひたと見候て其後蘭丸にて候由申候て、馬上にて悦び尻もちつき

申由に候。四方田は後に越前へ抱被申候。丹波士の由に候。四方田をよもだと讀申はあしく候。音にてしはうでんと讀申筈に候。それをしわうでんと讀誤申候。今越前に子孫あり四王天と書す。右之一、松永貞徳被書候戴恩記と申物に有之候。實録と見え申候。本堂に鎗のかゝり候て大勢込入候時落申事、又は蘭丸が修禪寺紙の平元結など、左様に可有之事に候。惣て實記はか様の所にて知申候。明智目くらく成申事天罰と申候得共、うろたへ申儀に候。それ則天罰と奉存候。易喜易怒は小器にて候。是にて志を得申事成可申候哉。膽小にして心大なるにて候。

一、土屋主税が赤穂義士の處置

赤穂義士敵討の時、吉良上野介宅へ押寄候て、先隣家屋敷土屋主税方へ吉田忠左衛門方より、使者を差越候て申候は、淺野内匠頭家來共、主人の敵に候故、唯今吉良上野介殿宅へ押込申候。可及騒動候間、前廉御案内申上候。士は相互の儀に候間、無御構爲御討被成可被下候由申入候。主税聞被申、心得申旨返答有之。扱家來透と屏際へ出し、挑燈ひしと指上候て其下に射手を揃へ、もし堀など乗申者候は

じ、射て落候様に申付、其身は床机に腰を懸、事濟候迄居被申由に候。隣の儀に候ゆゑ手に取候様に聞え申候。無念成事に候。取にがし申と見申候。尋候へども見不申旨、口々に申音いたし候へば、忠左衛門聲として少もせき申間敷候。見え不申候へば夜明候ても、明日一日懸り候て成共、尋可申候。心靜に随分さがし候へと申音いたし、其後右様に申さぬかと大音にて誰やらん申候。又一人額の疵を見よと申音いたし候。暫いたし大勢の聲にて、わつと啼申聲仕候。是は上野介のしるしをあげ候て悦泣と聞え申候。其後又忠左衛門方より土屋主税へ使者指越、唯今上野介殿を手に入候に付、目あかしの者共に爲見候へば、まがひもなく上野介殿にて候由申に付、御しるしをあげ申候。狼藉の事不及是非儀ながら、騒動を仕候事迷惑に奉存候。右爲御案内又申進候由申越、其まゝ引申候。最前押込申時分、障子戸などかけやにて打破申音、竹などひしき申様に聞え申候由に候。其翌日新井氏、主税方へ被參候て、直に主税咄聞被申由に候。主税方に浪人、是も先年父やらん兄やらんの敵を、りつぱに打申者居申候。此者も其夜の有様、目のあたり見